

自然の中で

野外教育情報

2020 第 12 号 ◆今号の特集◆ 「こだわりの道具」

令和2年7月20日発行

公益財団法人 日本教育科学研究所

自然環境での不自然な道具

田口 真嗣 (株式会社オンウィップス代表・一般社団法人天才の卵代表理事)

長野県白馬村という自然の中で暮らして25年目。野外活動を生業とし、多様な事業に取り組んでおります。私の現在の活動に大きな影響を与えた21年前の冒険教育との出会いや、不自然なサイコロについての話です。

衝撃的な数日間の冒険教育講習会では、ダイナミックな刺激とスタティックな学びが波のように構成されており、次々と押し寄せる刺激を魔法のように感じた事をはっきりと記憶しています。

未知の世界に突入するダイナミックな活動では、当然ながらわかりやすく学びを得る事ができます。それとは対照的でスタティックな活動なのに、とても印象深く記憶に残っている出来事がありました。

その出来事とは、活動を振り返り学びを共有していた静的な状況下で、ごく普通のサイコロが登場し、サイコロになぞられた表現を使ったアクティビティを通じて、比喩的に、今必要な事が気づかされたのです。「あっそうか!」と声が出て、全身で感情表現する行動を取ってしまった鮮明な記憶です。

見立て遊びを介して、心を動かすというなんとも洗練された手法に驚かされたのです。まさに技術の遊び化です。その場をきっかけに、物の見方が変化し、先入観や固定観念の不要性を感じ、理屈によって事象を説明されたのではなく、意外性が、学びへの行動変容を生み出したのです。物が持つ概念の落差が学びを拡張する。凄い技だ! と感動しました。

それ以来、サイコロを使ったアクティビティを独自で沢山作り、試行錯誤を繰り返しています。またサイコロ以外のボールペンや輪ゴムやハンカチなどなど、身近な物を教材化し、比喩を使って伝える手法を日々研究しています。私の指導現場(室内でも野外でも)には常にサイコロが存在します。使うか使わないかは別にして心の支えでしょうか、これさえあればどんな窮地であっても乗り越えられる自信さえ感じます。辞書を引けば、「道具とは仕事をはかどらせるための器具である。」と定義されていますが、私は、「道具とは相棒である」と定義したいです。

● 田口真嗣 (たぐち しんじ) 1961年大阪府生まれ。阪神淡路大震災で被災し長野県白馬村に移住。大阪体育大学卒業後、大阪府教育委員会～スポーツトレーナー～貿易業～旅行業～宿泊業を経て、野外活動を推進する会社を起業し現在に至る。NPO法人ピープルアクティブライフ理事・信州外遊びネットワーク代表でもある。

野外指導必携こだわり小道具



高山 昌紀

野外でのアウトドアルーダー育成において、指導者ならではの装備ってありますよね。ここではティーチングと環境配慮生活に欠かせない、私のこだわり道具をご紹介します。

① Crazy Creek【座椅子】 長期遠征中とはいえ、ずっと歩き通しているわけではなく、大休止や食事等でゆっくり座りますよね。WEA [Wilderness Education Association] のエデュケーターである私は、ビバークサイトに停泊して、野外生活技術、遠征計画、リーダーシップ、教育、安全管理、環境スキルに関するティーチングも行います。

そこで活躍するのが、座り心地と携帯性に優れた Crazy Creekの座椅子！あまりにも便利なので日常生活はもちろん、子どもの運動会等の行事にも持参。一躍人気者です。

② DIY【ホワイトボード】 「山でホワイトボード!?!」と思うかもしれませんが、プリントは紛失によって山にダメージを与え、濡れによってゴミになります。ホワイトボードはそのリスクを下げ、ティーチャブルに伝えたいことを書いたり消したりできる点でかなりの優れもの！

100均で購入したホワイトボードシート2枚を貼り合わせて両面仕様にし、座椅子を画板&掲示板として活用しています。

③ UNIFLAME【FDシリコンスプーン】 活動中は環境倫理であるLNT: Leave No Traceの原則3「ゴミの適切な処理」にも努めています。食事後の食器洗いは、ティッシュ拭きではゴミになる上に、



どう考えても目に見えない汚れが落ちることはありません。そこで、食器の衛生管理には、お湯を使ったグレーウォーターテクニックがおすすめです！そのためにも、食器にへばりついている具材や油分などはしっかりこそぎ取ることが大切。そこで活躍するのがシリコン製スクレーパータイプのスプーン！



小学生の長男も山飯を堪能した後は、しれーっとグレーウォーター処理を完璧にこなしています。親父兼LNTトレーナー冥利に尽きますなー(笑)。

④ SEA TO SUMMIT【ポケットショベル/トロウエル】 食べたら出す。健康管理には重要ですよね。残置せざるを得ないウ○チについてはキャットホールという山のトイレテクニックを使って土壌分解しやすいように努めています。そこで役立つのが、軽量コンパクトなLNT認定ポケットショベル！キャットホールに適した深さを掘るにも堅牢なブレードで安心。使用済みのペーパーは、ジッパーバッグ+黒いビニール袋でつくったエチケット袋に収納し、衛生的に持ち帰ります。



● 高山 昌紀 [たかやま まさき]
Asobenture Life Japan 代表

東京マラソン財団 VOLUNTAIRER研修アドバイザー、Wilderness Education Association Japan 理事。Leave No Trace トレーナー、日本防災士機構 防災士

楽しいを發明する



—四つ切ドラム缶ピザ釜—

林田 昌明

野外炊事の定番と言えばカレーライスやBBQが挙げられる中、ピザを導入している所も多いのではないのでしょうか。

ドラム缶一本そのままの、古い郵便ポストのようなドラム缶ピザ釜を使用しているところが多い事でしょう。あのフォルム、ちょっと愛らしく見えますよね。

私の職場である七沢自然ふれあいセンターでもドラム缶ピザを導入していますが、その形が他所とは少し異なります。

私がセンターに赴任した際、ピザは元々一斗缶をオープンにして焼いていたのですが、準備の煩雑さや安全上の課題が多いメニューでした。

センターの野外炊事場は200人の定員で、かまども32基が常設されています。大人数で活動する上で、その安全を確保する事は施設が一番に考えなくてはいけない事ですが、同時に「もっと楽しくできるはず」と考えました。

当時の一斗缶のピザ釜は蓋をして加熱をする事で熱を逃がさないようにするのですが、いかんせん焼けているか中が見えない為、黒こげだったり、生焼けだったり、失敗が多く見られました。

子ども達だって美味しくないと食べて楽しいはずありません。そこで、手順やマニュアルの作成はもちろんですが、根本的な「道具」であるピザ釜を見直しました。

学生時代に郵便ポストタイプのドラム缶ピザ釜を自作し愛用していた経緯からその導入を考えたのですが、32本ものドラム缶を準備するとなるとコストもかかるし、その加工にも時間がかかる…

何か上手い方法がないかと、野外炊事場をうろうろ…。ふと、かまどを見てひらめきました。運も良かったかもしれません。基本的なサイズのドラム缶を上下左右に四つに切り分けたものが、野外炊事場のかまどの蓋の様にジャストフィット。

これまで使用していたアルミのプレートと耐火

煉瓦を活用する事で下からの熱を調整出来ました。さらに燃え上がった炎がアーチ状のドラム缶を伝わり、上からの熱を加えてくれます。

頭の中で中島みゆきさんの歌が流れます。そしてあのナレーション、「四つ切りドラム缶ピザ釜が…できた」。

世紀の大發明。とは言わないまでも、これまでの道具の課題をクリアした四つ切ドラム缶ピザ釜。コストと制作時間は四分の一に削減、子ども達の楽しさも四倍（当社比）です。



道具の中にはケガの恐れがある危険なものもあります。しかしながらそれを排除する事なく、正しく安全を提供する事で子ども達に新しい楽しさが伝わると考えています。

目の前でチーズと生地がその姿を変えていく様子を見て、さらにそれを頬張った時の美味しさは子どもの「楽しい」という感情を爆発させます。

これからも道具の工夫と安全を第一に考えて、「もっと楽しい」を發明していきたいと思った瞬間でした。

● 林田 昌明【はやしだ まさあき】

厚木市七沢自然ふれあいセンター指導総括

1980年神奈川県生まれ。NPO法人国際自然大学校在籍。神奈川県立ふれあいの村職員を経て、平成26年より生まれ育った厚木市で自分の原点ともいえる七沢ふれあいセンターに赴任。

ひとと自然とうたとギター



吉沢 充世

野外活動の指導現場にギターを持ち込むようになって、かれこれ30年になります。ギターはまったくの独学。30年たっても、コードをジャカジャカ弾く程度で、まったく上達しません。でも、ギターに合わせて歌ったり踊ったりするのは、本当に楽しいし心地よいです。

現在使っているギターは、初代Morris、二代目Martinに続いて3代目。メーカーは、Alvarez。

お茶の水の楽器店で試し弾きをし、その響きの良さに予算オーバーにもかかわらず購入してしまいました。中古で7万円を超えていたと記憶しているので、正価は10数万円の代物でしょうか。

野外の現場で使うということは、直射日光にさらされ、突然の雨にうたれ、極寒の雪中に放置され、キャンプファイヤーの炎にあぶられるわけで、楽器としてまともに扱うのは不可能です。音楽に携わっている方々からみれば、言語道断の扱い方です。でも、私の相方として様々な自然環境の中で常に心地よい音を響かせてくれて、使えば使うほど言い知れぬ愛着がわいてくるのです。

私のギターが一番活躍するのは、やはりキャンプファイヤーということになりますが、もっと働いてくれるのは、歌を作るときです。私は、20年ほど前から、小学校の自然教室などの現場で、子どもたちの様子を見ながら歌を作り、キャンプファイヤーの場で歌うようになりました。

3泊4日の3日目に詞を書きメロディーをつけます。夜のキャンプファイヤーに間に合わせたいので、シンプルな歌にしかありませんが、それでも可能な限り想いが届く歌を作ろうとがくのです。現在では、作った歌は80曲を超えました。その歌を口ずさめば、当時の風景が鮮やかによみがえってきます。こうして今では、野外活動の現場でギターはなくてはならない存在となりました。

5歳の頃からピアノを習い、中学生の頃からシンセサイザーにはまり、小学校の教員になってか



らも、楽器演奏といえば鍵盤楽器だったのですが、野外活動の現場ではなかなか使いやすい鍵盤楽器はありません。

野外活動で使うためには、電源がいらないこと、弾き語りができること、持ち運びが簡単なことが条件になります。さらに欲を言えば、ある程度の音量があって、なおかつ音が響くと理想的です。学生の頃はアコーディオンを使ってみたり、ギターを弾くようになってからはギタレレやウクレレも試してみましたが、30~40人規模のキャンプファイヤーでは、やはりギターの一択という結論に至りました。

子どもたちから、クラス全員の名前が書きこまれた本革のギターストラップをプレゼントしてもらったり、おこづかいでピックを買ってもらったりと、ギターを使ってきたからこそそのエピソードも生まれました。

ひとと自然とうたとギター。いつもかたわらに置いておきたいと強く思うのです。

● 吉沢 充世【よしざわ あつよ】

自然体験活動指導者

WMAJ野外・災害救急法インストラクター

1965年横浜生まれ。小学校教員を経てフリーの自然体験活動指導者となり、教育キャンプの指導を中心に活動。2019年より Wilderness Medical Associates Japan (WMAJ) 野外・災害救急法インストラクター。年間を通じて野外・災害救急法の普及につとめている。

おいしい野外料理のためのアイテム

こだわりの道具



蓮池 陽子

野外料理は、アクティビティや目的、対象によってメニューが変わってきます。登山の場合は、短時間、低燃料で作れ、栄養価が高く、体が温まるが優先ですが、キャンプの場合は、作るプロセスや見た目の楽しさが大切になってきます。その時々に適した“ベストなメニュー”を“おいしく”仕上げてくれるアイテムをご紹介します。

シャトルシェフ [THERMOS]

THERMOS製品の保温力は圧倒的。ヤマセンボトルなど個装に使用するものから、シャトルシェフなど料理に使うものまでありますが、どれを取っても抜群に安定しています。



シャトルシェフは保温容器の中に調理鍋が収まる構造です。調理鍋は火にかけられ、ある程度加熱したらあとは保温容器に移せば高温のまま保温できるので加熱が進むという鍋です。これを使えばスープ、炊飯、パンなどの発酵、温度管理すれば甘酒などの低温調理なども可能です。

寒い日はシチュー、ポトフなどに、暑い日は冷汁やそうめん、デザートをキンキンに冷やしておけます。過酷な天候状況であればあるほど、料理する人を助けてくれる調理道具です。

シリコンスプーン [無印良品]

ビジュアルが美しいだけでなく、「使い手のお困りごとを一気に引き受けてくれる」使い勝手が良

いもので、とても汎用性が高いものです。

- ・炒める＝木べら代わりに。
- ・盛り付ける＝スプーン代わりに。
- ・サーブする＝サーブスプーン代わりに。
- ・皿に残ったものを寄せ集めることができる＝ゴムヘラ代わりに。



(デザイン：角田陽太)

590円と価格も可愛い。使い心地よく美しい、まるで現代の民芸のようなスプーンです。

葉やクロスでおいしさの演出を

何気ない草木や石をよく見ると実に美しいもの



が多いです。毒草には注意して「野外ならではの美しさ」を見つけ、テーブルを飾ってみてはいかがでしょうか？ 手持ちの手ぬぐい1枚でも彩ることができます。味気のないプラスチックの皿をどうおいしそうに演出できるか？ 指導者の美的センスは、笑いのセンス同様とても重要です。

「細部のこだわりは、相手にも伝わる」は、食においても同じなのです。

● 蓮池 陽子 [はすいけ ようこ]

Atelier Story主宰

料理家、アウトドアフードコーディネーター

自然、食、人のつながりを料理で紡ぐをテーマに活動。著書に「キャンプの肉料理」「アウトドアでホットサンド」「げんさんとよこさんの山ごはん」など

道具とのつきあい



三宅 信

キャンプや作業をするのに多くの道具を使っており、それにより便利に、また自分の力だけでは出来ないことまで、道具は可能にしてくれます。目的により使いやすい道具を選び、時にはより快適に進めるため新たに入手することもあります。

しかしともすると、道具に頼ることで、自分の能力以上のことをしてしまうことや、また道具に固執してしまうがために作業方法や手順の選択を誤ってしまうこともあります。

そんな時には、ヒヤリとする経験をすることがあります。

私は薪ストーブライフのために、知り合いの林で薪作りをしています。その際はチェーンソーを使って伐木作業もしています。(※林業就業支援講習、チェーンソー特別教育を修了しています。)

チェーンソーを使うことによって、体力的にも時間的にも無理なく必要量の薪を確保することが出来ます。ただ何回伐木経験をしても、伐倒する際には毎回緊張をし、木がしっかりと着地をして初めてホッとします。

この薪作り作業を安全に続けていくためには、その時の自分の能力、技術、道具と照らし合わせ、時にはその木の伐木を諦めることも大事なことだと考えるようにしています。



いつも伐木現場に行く際に共にする道具たち

また、道具頼みになりすぎて、上手く作業が進まない場面もあります。普段使い慣れていて、メンテナンスも行っているつもりなのに、現場に行ったらチェーンソーのエンジンが掛からない、あれこれ手を尽くしても改善せず、時間だけが過ぎていくなんてことがあります。

そんな時には、『チェーンソーのご機嫌を損ねてしまった』と思うようにして、一度チェーンソーを使うのを諦め、その日持参している道具で出来る作業に切り替えるようにしています。

ノコギリやナタで林の手入れをして、作業環境を整えるのに時間を使ったり、その後の作業手順、方法などを見直したりします。そうすることによって、ちゃんと見えていなかった林の状態に気づくことが出来たり、自分が考えていた作業手順や方法より、安全でかつ効率の良いものを思いつくことが良くあります。

キャンプの中でも作業の中でも、道具とのつきあい方で色々な可能性があることに魅力を感じていると思っています。そこにある能力×道具で可能性が広がり、またその場の環境などが合わさって、同じことは起こることがないのです。

自分の工夫や創造性でより良いモノが出来上がることが本当に楽しく感じております。そんな楽しい体験を道具とのつきあいから与えてもらっていることを大切にしながら、これからも道具とつきあっていければと思います。

● 三宅 信 [みやけまこと]

自然楽舎代表

みつけ。1969年東京生まれ。現在は山梨・八ヶ岳南麓に住み、フリーランスの“楽”場づくりファシリテーターとして数多くの野外活動や研修の場に関わりを持つ。

生活の質を上げてくれる



鈴木 かなえ

私の記憶に強く残っているこだわりの道具は、18年半前、米国ミネソタ州のVoyageur Outward Bound Schoolという野外学校で出会った、キャンバス生地の大きなテントと、その中で焚く薪ストーブです。持ち物の選択には、即乾性、軽量化を重視させる面もありながら、「犬ゾリに載せられるからといって、こんなに重くてかさばる物をよく持っていくな」と、驚かされました。

この学校は、北緯47度あたりに位置しています。その北部には、大小たくさんの湖が点在し、湖を繋ぐあまたの小川が流れる森林地帯が広がっていて、春から秋にかけてのシーズンは、カヌーで移動しながらキャンプが楽しめます。氷点下の続く冬場は、水路が雪に閉ざされてしまいますが、雪道や凍った湖面は、ハスキー犬のソリで旅することができます。

犬と人間の食糧、寝袋や着替えなど個人の装備、テントや調理道具などグループの道具を積むと、出発時のソリは300kgにもなります。6頭を2列に繋いで引かせますが、人間が1人か2人でソリの後部に立ち乗りし、スピードや方向を調整します。上り勾配では降りて押しながら走り、下り勾配や曲がり道ではソリが犬たちを巻き込まないようにロープで牽引しながら、犬たちと協力し合って進みます。林間の倒木や湖面の溶け具合などを確認するために、グループの半分はノルディックスキーで先に出発します。

テントは8畳ほどの大きさで、周囲にロープを打ち込むスペースも必要なため、林間部では設営できません。設営と薪の準備に時間がかかるため、午後3時には湖にたどり着き、設営を始めるのが理想です。最も大変なのは、薪の準備で、森林から引きずり出してきた木をノコギリでストーブの奥行き長さの長さに切り分け、ナタで割ります。ストーブと煙突を組み立てて繋げ、収納されている木箱を横倒しにして、金属が貼られた面に乗せます。



フライパンでも置いておけば、上からの余熱で調理もできます。ストーブの上ではお湯が沸かせます。強い火力で、プラスチック以外のゴミは焼却できます。テントの中も温度が上がり、薄着になって濡れた衣類も乾かせます。温まると湖面が溶けて足元は水浸しになるので、寝るのはテントの外ですが、体が暖まっているのでよく眠れます。テントとストーブは、朝食の後、スキーチームを送り出してから、犬ゾリチームが撤収します。

今ふりかえると、無駄が多いと思っていた薪ストーブとテントは、気持ちのリフレッシュや体の休息をもたらしてくれたことの価値の方が大切に感じます。こだわりの道具を「野外活動の過大な装備」と拒否するよりも、「生活の質を上げてくれる装置」と気づける自分の方が、幸せ度が高くていいなと思えるようになりました。



● 鈴木 かなえ [すずき かなえ]
東洋大学 T A (Teaching Assistant)

1971年生まれ、東京都出身、日本大学文理学部教育学科を卒業後、武蔵野市野外活動センターのキャンプカウンセラーを経験、渡米して語学学校から始めて、ミネソタ州立大学マンケイト校にてExperiential Educationを学んで帰国。チャイルドラインながの事務局、桐朋女子中学高等学校の保健体育科非常勤講師などを経て、現在に至る。



「アイオレ」に一目惚れ

加々美 貴代

私がアイオレシートを知ったのは今から5年前に日帰りの講習会と2泊3日の指導法講習会の講師を依頼された時です。

初見にも関わらずカラフルに「シート」化されたゲーム内容を確認しながら、様々なシーンが想像できました。どれもワクワクする内容で、それ以来至る所で少しずつアレンジして活用しています。年齢やフィールドに限定されることなく、幅広く使えるのが最大の魅力だと感じています。

私が活動の中で一番大切にしている「センス・オブ・ワンダー」を伝えるのにも特に適していると思います。

森林環境教育を主体として活動をしているので、ゲームの中でも特に好きなのは「手と鼻で自然観察」や「食べ跡探偵団」「移り木」などです。馬鹿の一つ覚えのように上記の3つは毎回実施しているかもしれません。

昨年は他団体からの依頼で保育士向けの研修会で「アイオレ」をメインに実施しました。

日々幼児を相手に仕事をされているので、「アイオレ」の世界にも直にすなりと飛び込んでいました。また、想像以上のアレンジ力を発揮している姿を見て、保育士の皆さんにこそ「アイオレ」

を知って、活用して欲しいと強く感じました。

実施したゲームは「移り木」「手と鼻で自然観察」「ミクロな世界みーつけた」などです。「手と鼻で自然観察」は皆さんの感性の良さに驚かされました。じっくりと手と鼻で観察し、全員の方が正解でした。

自然の中で自然の素材を使ったゲームは植物の名前を知らなくても興味を持って活動に関わることができます。それがきっかけで自然や植物、昆虫などについてももっと知りたい、学びたい欲求につながる要素が沢山あります。

だからこそ、幼児と日々過ごしている保育士の皆さんには「アイオレ」を通じて自然の楽しみ方を自ら知って、子どもたちに伝えて欲しいです。

今回の講習会では十分に手応えを感じました。保育士の皆さんも「アイオレ」のファンになったことでしょう。

今年は新型コロナウイルス感染症の影響で中止となってしまいましたが、植物が好きなシニア向けの自然観察講座でも活用しようと考えていました。植物の楽しみ方を単に「名前を覚える」ことに限定せずに、お孫さんとも楽しめる自然の楽しみ方を伝えようと考えています。来年の実施を今から楽しみにしています。

自分自身が指導者としても楽しめ、さらに参加者としても楽しめる「アイオレ」は、同じゲームでも指導者によって違った味付けや工夫が可能だからでしょう。これからも「アイオレ」の魅力を様々なシーンで活用し、自然の素晴らしさ、楽しさ、大切さを伝えていきたいです。

● 加々美 貴代 [かがみ きよ]
NPO法人やまぼうし自然学校 代表理事

長野県安曇野市出身。森林環境教育、指導者養成に力を入れて活動を展開中。常に自然、森、樹との関わりを持って現在に至る。



「手と鼻で自然観察」(IORE SHEET NO.8)



「アイオレ」利用上の留意点

島崎 晋亮

アイオレシートを含めたパッケージド・プログラムは、私の仕事の中で頻繁に使われています。小学生を対象におこなう時もあれば、大人を対象にする時もあります。また、森の中でおこなうこともあれば、会議室でおこなうこともあります。

さらに、一日をかけていくつもの活動をおこなうこともあれば、数時間の中で数個の活動をおこなうこともあります。そういった汎用性に長けている点も、パッケージド・プログラムが広く使われている理由の一つだと思います。

私の仕事はチームビルディングを目的とした活動が多いため、課題解決型の活動をおこなう際に気をつけている点をご紹介します。

【活動の選択】 各活動には特性があります。例えば、同じ課題解決型でも、グループで顔を合わせて相談しやすい環境で取り組む課題もあれば、「ラインナップ(NO.18)」のように落ち着いて話し合うことが難しい環境でおこなうものもあります。また、「クモの巣(NO.35)」のように他者を持ち上げて動かす場面がある活動に挑戦する際には、事前にグループの中で信頼感が生まれていないと、心理的にも身体的にもリスクが高まります。

そのため、まず「風に吹かれて(NO.16)」のように他者を支えたり他者に体を委ねたりする体験を踏み、信頼感を高めてからおこなう必要があります。活動の特性を理解し、環境やグループの状態に合った活動を選択するよう心がけています。

【使用する備品やルールの設定】 「森の中の危険物処理班(NO.13)」は、私の好きな活動の一つです。しかし、自転車のゴムチューブと細引きで作るマジック・ハンドや、適当な大きさの缶をいくつも準備するのは大変です。それらの備品がない場合は、マジック・ハンドの代わりに細引きのみとし、缶の代わりにペットボトルを使って実施します。それにともなって、この活動の目的である「協力・コミュニケーション・柔軟な発想・さまざまなアイデア」を最大限に引き出せるようなルー

ルに変更します。このように「この備品がないからできない」と考えるのではなく、ある備品を工夫して活用することも楽しさに繋がります。

また、課題とルールはできるだけシンプルにすることも大事です。ルールの数が多く複雑なものであると、学習者を混乱に導きます。もちろん、指導者として課題とルールをわかりやすく説明する工夫も大切です。課題の難易度を学習者に合わせることも指導者の腕の見せ所です。どんなに良い活動を準備しても、学習者の学びを生むことができるかは、指導者のスキルにかかっています。

多くの方が書かれているように、アウトドア指導法講習会でおこなう「参加者が新たな活動を創作する時間」にこそ、大きな学びと楽しさがあると思っています。これまでの活動にとらわれず、既存の活動をアレンジして状況に応じた活動をおこなえるよう、指導力磨きに精を出しましょう！



「クモの巣」(IORE SHEET NO.35)

● 島崎 晋亮 [しまさき しんすけ]

(株) 信州アウトドアプロジェクト 代表取締役

1982年生まれ。石川県出身。信州大学にて野外教育を専攻後、教育学修士取得。信州アウトドアプロジェクトを設立し、学校や大学等の教育機関をはじめスポーツチームや企業を対象に、野外教育を用いた研修等の企画・指導をおこなう。長野県栄村で、里山をフィールドとした教育活動や、観光事業も手がける。一般社団法人Wilderness Education Association Japan (WEAJ)副代表理事。



指導者としての指針を育む

素晴らしい研修 インストラクターの心の基盤

安達 ナオコ

村尾正彦氏（株式会社ドリームビレッジ代表取締役）に勧められ、平成30年10月、国立那須甲子青少年自然の家で行われた、アウトドアゲーム指導法講習会に参加させていただきました。

当時、私は「アイスクライミング」というマイナースポーツのインストラクターを目指しており、インストラクターとして「技術」だけを教えるのではなく、「スポーツに対してのモチベーションの持続」や「スポーツを通しての仲間意識の更なる向上」が不可欠だと考えていました。

この講習は「子どもたちへの指導法」ということでしたが、スポーツに取り組む姿勢は大人も子どもも変わらないので指導のヒントを学びたいと思いました。

初めてお会いする参加者の皆さんとの森林学校以来の共同生活や、慣れない横文字？「アイオレシート」や「アイスブレイク」に戸惑いながら、「こんな難しい課題を子どもが解決できるんだ！」とか「創作ゲームを作るのがこんなに難しいんだ」とか頭も気持ちもパンクしそうでした（笑）が、自身は童心に戻り、取り組んだ2泊3日の講習は「主体性を持って行動できる自由な講習」でした。

数々のゲームの中にも自己表現は必要ですし、コミュニケーションも不可欠です。複数人が集まって問題を解決していくために、個々に「目標」を持つことが大変大切だと感じました。

何よりも良かったのが、各ゲームに素晴らしい講師が一人一人直接関わってくださったことでした。ゲームの準備やご指導などを直接目の当たりに出来る贅沢なカリキュラム！

先生達は人の才能を発見する天才でした。我々の行動を先生方は楽しみながらご覧になり、満面の笑みで誉めてくださいました。この年になっても褒められるのは嬉しいものです。「ダメ出し」ではなく「もっと良くなる」という言葉のニュアンスもただただ感心しましたし、雰囲気作りも絶妙でモチベーションを上げる天才でもありました。

指導者（インストラクター）は、「自分の身体、五感を働かせ、状況分析をし、主体的に行動できる」術を生徒さんに身に付けてもらうことが大切だと学ばせていただきました。

研修後、平成31年1月から、アイスクライミングインストラクターとして生徒さんと向き合いはじめました。

那須甲子で学んだことを基盤にし、「生徒さん一人一人の目標の尊重」「モチベーション維持（雰囲気作り）の重視」「他者理解（認め合う）」「己を分析する」ことを生徒さん達と創造してまいりました。結果、目標に向けて切磋琢磨して頑張ってきた生徒さんたちは、令和元年の冬、自身の目標を達成しました！仲間の達成を心から祝福し、刺激を受け、素晴らしい相乗効果を生みました！

自身の体験から、指導者を目指す方にアウトドアゲーム指導法講習会に参加されることをお勧めしたいです。素晴らしい講師の皆様からたくさんのヒントをいただけます。また、先生方とお会いしたいです！ありがとうございました。

● 安達 ナオコ [あだち なおこ]
 ビナクルマウンテンアクティビティ代表
 アイスクライミングインストラクター

1971年静岡県出身。跡見学園女子大学文学部卒。現在の居は長野県上田市。夫と犬3匹と暮らす。



アイスクライミング講習で生徒さんたちとスタッフと。



IOREに出会う前と後

加藤 寿宏

かれこれ川のガイドとして働き始めて20年弱になろうとしています。イメージとしてはラフティングでワイワイ騒ぎながら川下りを楽しむ！そんなスタイルでガイドをしてきました。

2006年に独立。新たなガイドとしてスタートを決めたのです。それは「ワイワイ騒ぎ」からの卒業でした。どこかに疑問を感じていたんですね「ワイワイ騒ぎ」に。もちろんエキサイティングな川下りは魅力的です。だけど自然の中へ入るなら自然のコトを知って欲しい。「楽しかったねえ」だけじゃなくて自然のコトを感じて帰ってほしい気持ちがいいつも片隅あったんです。だから独立と同時に卒業しようと決めました「ワイワイ」から。

でもそこからが大変でした！今思えばお恥ずかしい話ですが「自然の魅力を感じて欲しい」という気持ちだけで自然の知識なんて殆どありませんでした。そこからは図鑑とカメラを持って毎日のようにフィールドへ出掛け、図鑑で分からないものはカメラで撮って帰り、ネットや図書館で調べてを繰り返す日々。シワの無くなった脳ミソへ鞭を打ちシワを寄せていきました。

その甲斐もありそれなりの知識を習得しお客様へ伝えられるようになりました。ツアーでもお客様の視界に入るものに解説を加え自然のコトを知って頂けるようになってきたんです。ところが…。

自然解説をすると、「へーっ！」や「ほーお！」と大人からは反応が返ってくる。でも子どもは解説を聞いてはくれますが終わると「ブイッ！」と反応もなく視線を外してしまいます。それならまだしも、解説途中で「ブイッ！」ということもしばしば。親は気を使って「ちゃんと聞きなさい！」といってしまうありさま。なんともトホホな日々がありました。考えてみれば子どもにとってはどうでも良いことで知識の押し売りをしていたんだなあ、と反省しています。つまり一方通行の想いだったんですね。

そしてその後を知る事となるのがインタプリ



川下りで水の循環について考える。

テーションやファシリテーションなどです。

その中の1つにアウトドアゲーム指導法がありました。ゲーム的な要素をもつIOREは子どもたちに関心や興味を持たせてくれるように構成されているので「ブイッ！」としていた子どもが視線を向けるどころか「ナニナニ！」って寄ってきます。主体性が生まれ、自ら自然への好奇心を持ってくれます。そして一番は五感を働かせて自然と接することを芽生えさせてくれること。子どもは知識より感じるコトが大事なんですね。

僕らのツアーは家族単位で小さいですが、その中でも使えるプログラムはたくさんあります。そしてそこからアレンジできることもIOREの良い所です。IOREにはたくさんのパッケージド・プログラムが集まっているのでフィールドに合わせて選択できるし、イラストも入っていて分かり易く解説をしてくれているので、若手に教える際にオジサンは怒らずに済みます。今回参加することでフィールドや対象人数、年齢層など、これから幅を広げた活動が出来そうです。講習会で出会った方々に感謝いたします。

● 加藤 寿宏 [かとう としひろ]
ウッキーズ (wokkys) 代表

1971年生。2001年静岡県から北海道へ移住。
脱サラしてガイドへ。今は水の循環をテーマに川下りを展開中。

道具も出番を待っている



中丸 信吾

いま私たちはこれまでに経験したことのない困難に直面しています。日本でもCOVID-19の猛威に多くの尊い命が奪われ、4月に発令された緊急事態宣言のもと、人命を第一優先とした「自粛生活」を余儀なくされました。

緊急事態宣言が解除されたいま（6月下旬）でも、まだまだ油断はできず「新しい生活様式」の実践が求められています。

COVID-19は経済活動にも大きな影響を及ぼしました。野外教育やアウトドア関連の事業も例外ではなく、春・夏の事業を中止や縮小せざるを得ない状況になりました。自粛期間では、オンラインでできる事業や、リモートでの体験指導を模索するなど、新たな事業形態に試行錯誤の日々だったのではないのでしょうか。

一方で、私たちが大切にしている「直接体験」の機会がいつ戻ってくるのかという漠然とした不安を抱きながら、出番を待っている道具のメンテナンスや改良、新調をしていた方も多いのではないのでしょうか。想い入れのある道具なら、なおさら心を込めて手入れをしたことと思います。

今回のテーマは「こだわりの道具」。フィールドでの活動になくてはならない道具について、こんな時だからこそ、フィールドで活動する7名の方に様々な視点から執筆していただきました。

携帯性と機能性のある道具、指導に欠かせない道具、もっと楽しいを生み出す道具、想いを伝えるための道具、生活の質を高める道具、可能性を

広げる道具、相棒である道具…。

今号を読んで、フィールドでの活動に期待をふくらませて、道具を手にとった方も多いのではないのでしょうか。かく言う私もその一人です。

映画「トイストーリー」でおもちゃに心があるように、もし道具に心があるなら、私たちや子どもたちがフィールドでの活動を楽しみにしているのと同じく、道具たちも出番を心待ちにしているに違いありません。

緊急事態宣言が解除されたいま、COVID-19を正しく恐れながらも、活動の再開に向けて動き出すことも大切ですね。「こころ」と「からだ」とともに「道具」の準備も万全にしておきたいものです。

最後に、COVID-19で亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、1日でも早く日常が戻ってくることを願っています。



● 中丸 信吾 [なかまる しんご]

日本女子体育大学 講師

当研究所自然体験活動推進委員・機関誌編集委員

野外教育情報 2020 第12号 令和2年(2020)年7月20日発行

発行所 公益財団法人 日本教育科学研究所

Japan Institute of Scientific Research for Education

〒104-0045 東京都中央区築地1丁目12番22号 コンワビル 5階

TEL. 03-6278-7761 / FAX. 03-6278-7683 <http://www.zaidan-kyoiku.or.jp/>

編集委員 野口和行、中丸信吾、金山竜也、鎌田晴美（自然体験活動推進委員会 機関誌・情報部会）

印刷所 株式会社サンワ
デザイン=寺澤彰二